

イリミンスキー・システムの誕生 —カザン学区での「異族人」教育の実験—

奥村庸一

(北海道大学教育学部大学院)

1. はじめに

帝政ロシアにおける版図内諸民族支配の構造を理解する上で、教育の果たした役割は極めて重要である。とりわけ、1864年、中央部ロシアを対象に『初等国民学校規程』が制定されたのを手始めに、政府によって初等国民教育制度が構想され、文化的支配の射程が民衆レベルにまで広がるに及んで、教育を媒介とした周辺諸民族民衆のロシア化という課題が大きく浮上する。そしてロシア化の中身の問題として、教授言語や学校での宗教の扱いが、政府及び諸民族地域の教育家の間での重要な論点となり、学校は、言語・宗教政策のいわば結節点として意識されることとなる。論者はこれまでに帝政末期ロシアにおける対東方諸民族民衆初等教育の基本規程たる『異族人教育規則』(1870年)の制定過程と以下紹介する東洋語学者イリミンスキーのそこでの役割について解明してきた。『異族人教育規則』は、教授行為の補助的手段として諸民族の「方言(narechie)」の利用を認めはしたものの、その一方で、民族語による教育を核としたイリミンスキー・システムの理念に対する政府の警戒感とともにロシア語の普及を基軸としたロシア化という政府の立場の輪郭を浮き彫りにするものであった。論者としては、今後、イリミンスキーの教育理念と実践の全体を19世紀後半帝政ロシアの民族教育政策の中に位置づけることで東方アジア系諸民族に対する支配構造の特質を明らかにしていきたいと考える。

本稿では、東洋語学者にして教育活動家、また「母語による教育」を核とするイリミンスキー・システムで知られるニコライ・イヴァーノヴィチ・イリミンスキー(1822-1891)によるクリャシェン・タタール(キリスト教の洗礼を受けたタタール)を対象にした教育実践活動のありようを1860年代前半に的を絞って検討する。その際さしあたって、雑誌『正教時評』(*Pravoslavnoe obozrenie*)に掲載されたイリミンスキー自身の手による実践報告に依りながら、彼の初期の教育実践活動の実相把握に務めたいと思う。

イリミンスキーは、1822年にペンザ県の司祭の子として生まれ、1846年、カザン神学大学卒業と同時に同校の教授となり、東洋語学者としての道を歩みはじめた。この後、同大学におけるキリスト教関連諸文献のタタール語翻訳事業に参加するが、そ

の一方で彼は、ヴォルガ中流域地域へのイスラム教の浸透がこの地域の諸民族の生活様式、言語の多様性を破壊するのではないかとの危機意識を強める。こうして 1860 年代以降、イリミンスキーは、まずタタール人を対象にした民衆初等学校の運営に携わり、さらに 1872 年、設立と同時にカザン異族人教員セミナリア校長に就任してからは、1891 年に没するまでその職にあつて東方諸民族の初等学校教員養成に取り組んだ。本稿の対象となる 1860 年代前半は、カザン神学大学において培ってきた問題意識を反映させる形で、教育家としてのイリミンスキーの第一歩が踏み出される時期である。

さて、近年、諸民族を束ねるものとしての帝国ロシアの支配秩序のあり方を総体として明らかにしていこうとする方向性が教育史を含むロシア史学界の中で示されてきているが、そこではイリミンスキーをいかに理解するかという問題が一つの論点として提出されている。例えば、西山克典は、「帝政ロシアの全体としての『帝国』秩序の編成とその矛盾の把握は十分になされたとは言い難い」という現状認識に立って、ストルィピン期からスターリン体制確立までの時期に「帝国」の崩壊と再編の過程を見いだしつつ、「帝国」秩序のあり方を考察し、イリミンスキー・システムの「帝国」における位置についても論じている^{*1}。塩川伸明は、「帝国」ロシアを再考する際、同化論についてのきめ細かな検討が必要であるとした上で、ロシア帝国の宗教政策、言語政策の非一貫性の前提に「支配者の自意識において『自分よりも上』とみなされる民族・文化を抱え込んだ帝国の特殊性」があるとの指摘をしている。さらに塩川は自身の問題提起に引き寄せながら、検討を要する微妙な問題の一つとしてイリミンスキー・システムに論及している^{*2}。

上記方向性の提起とともに、教育を媒介とした帝國的支配の具体的相貌が、徐々にではあるが明らかにされつつある。橋本伸也は、帝国西部諸県内の中等・高等教育機関を舞台に、ポーランド人貴族を主な担い手とする地域の教育的伝統と地域の教育機関を帝国のシステムに取り込もうとする政策側の企図とがせめぎあう様について、ウヴァーロフ文政期（1833-1849）を中心に論じている^{*3}。なお、橋本は西部諸県において慎重に文化的同化主義を推し進めようとしたウヴァーロフ的政策が結局、権力内部の合意を得られず放棄されるに至ったことを指摘しているが、このことが東方、殊にカザン学区の教育政策との関連でいかなる意味を有するのかという点は、論者にとつ

*1 西山克典「帝国秩序の崩壊と再編」『ロシア史研究』第 64 号(1999)。

*2 塩川伸明「帝国の民族政策の基本は同化か？」同前所収。

*3 橋本伸也「『帝国』ロシアの教育政策—西部諸県教育政策と『ポーランド問題』—」若松寛編『帝国システムの比較史的研究』（科研費報告書・京都府立大学）、1998 年。

て今後検討せねばならない課題である。高橋清治は、19世紀以降の「ロシア帝国とその支配のありようの変化の位相に注目する」という角度から帝国のカフカス支配を巡る強圧的同化路線と地方主義的統治路線の角逐を歴史的に考察している。統治手法に関するこの政治的対立において教育政策、就中、初等教育における教授言語の問題は議論の焦点であり続けた^{*4}。またゲラシは「ロシア人が自己のアイデンティティの中で東方の民衆をいかに統合していこうとしたか」という関心から出発して、カザンにおける民族学研究、正教布教のあり方、民族・宗教を巡る公論等に関して詳細な検討を加えている。彼は「従来のこの分野の研究が政策主体としての帝国の中心か、あるいは周辺地域での政策の結果に過度に目を向けてきた」のに対して、自らの研究が「カザンを中心でありまた周辺として、そして少数民族地域経営の主体でありまた客体として」検討するものであると述べているが、これはイリミンスキー・システム評価においても重要な視点であろうと考える^{*5}。

2. カザン神学大学と東方諸民族への正教布教

さて、イリミンスキーによる「異族人」教育実践を検討する前に、まず、東方ロシアにおける正教布教の基点であり、イリミンスキー・システムによる実験的学校のいわば苗床となったカザン神学大学について簡単に述べておくことにする。同神学大学は1798年、モスクワ、キエフに次ぐ三番目の神学大学として、カザン神学セミナリアから昇格する形で生まれ、帝国東部の神学セミナリアを統括した。その後の再編の過程で一時期、モスクワ神学大学管下の神学セミナリアに降格していたが、1842年、宗務院は再びカザン神学大学に改組した。これには1820年代より顕著になるキリスト教徒「異族人」の棄教の波への対処としての意味がある。この期の棄教現象の原因についての詳細は明らかになっていないが、背景に、沿ヴォルガ地域非ロシア諸民族のムスリム・タタールへの経済的依存の深まりとそれに伴うムスリム・タタールの布教活動の活発化があったことは確かである。そしてその後、宗務院はこうした背景を認識した上で、従来の正教布教活動の停滞を克服しようとそのあり方の見直しを図っていった。1844年、神学大学当局はタタール、アラビア、モンゴル、カルムイク語の同大学での学習機会の提供の必要を決定した。当初、神学大学の学生がカザン大学へ出かけて行って授業を受けたが、その後、カザン大学のそれぞれの言語の教授がカ

*4 高橋清治「帝国のカフカス支配と『異族人教育』」『ロシア史研究』第60号(1997)。

*5 R.Geraci, "Windows on the East: Ethnography, Orthodoxy, and Russian Nathionality in Kazan, 1870-1914," Ph.D. dissertation (University of California at Berkely, 1995), p.11.

ザン神学大学に出向き授業を行った。この時の修了者の1人がイリミンスキー（タタール語、アラビア語）であった^{*6}。1846年、イリミンスキーは神学大学の聖書史の教授に就く。その後、1854年にはクリミア戦争をも一つのきっかけとして神学大学内に、対ムスリム、対仏教徒、対アニミスト、対古儀式派の四つの布教科が置かれる。また宗務院は、この新設の布教科の課程をいかなるものにすべきかの研究のため、1851年から1853年までイリミンスキーをエジプト、シリア、トルコに派遣した^{*7}。だが一方で、これら一連の施策をもって宗務院、あるいはカザン神学大学当局の改革に対する態度が首尾一貫したものであったと結論づけることは難しい。実際、カザン大主教、神学大学学長が替わるたびに布教科の処遇は大きく揺れ動き、しばしば同科の規模の縮小が画策されたし、それがもとになってのイリミンスキーと神学大学当局との間の確執も絶えなかった。

3. 「異族人」教育実践活動のはじまり－60年代前半の クリヤシェン・タタール学校

イリミンスキーの「異族人」教育活動の出発点であり、彼が「異族人」教育システムを構築していく際の土台となったクリヤシェン・タタール学校（1866年以降、中央クリヤシェン・タタール学校）は、1863年に、それまで『創世記』の口語タタール語訳でイリミンスキーの援助等をしていた1836年生まれのクリヤシェン・タタール、ヴァシーリ・ティモフェーエフが教師となって「大学から2つの古机と4つの長椅子、黒板を譲り受け」、3人のクリヤシェン・タタールの子どもとともに寄宿生活を始めたのが起源である^{*8}。翌1864年、カザン学区総監の承認を得て私立学校として開校する。以後、イリミンスキーは、ティモフェーエフと子どもたちの間の教授プロセスを観察しながら必要に応じてタタール語の翻訳教材を準備するとともに、「異族人」教育の方法上の理論を構築、検証するためのいわば実験室としてこの学校を活用した。なお、1863年から1913年の間に、4,454名の男子と1,885名の女子がこの学校で学び、うち163名が司祭となった^{*9}。

それではまず、学校設立当初、イリミンスキーがいかなる状況認識と決意をもって

*6 R.Geraci, op.cit., p.33.

*7 Ibid., p.38.

*8 N.I.II'minskii, *O sisteme prosveshcheniia inorodtsev i o Kazanskoi tsentral'noi kreshchenno-tatarskoi shkole* (Kazan', 1913), p.58.

*9 A.A.Rorlich, *The Volga Tatars: A Profile in National Resilience* (Stanford, Calif., 1986), p.46.

「異族人」教育活動に臨んだのかを見てみよう。彼は『正教時評』掲載の論稿で以下のように記している。

「[クリヤシェン・タタールの学校は、] 自らの目立った足跡を残してこなかった。キリスト教徒異族人大衆にキリスト教教育について知らせること、彼らの考えをキリスト教教理に向けて方向づけること、福音書の精神的な教えで心を生か返らせること、これらについて配慮することなく、考えつくことさえなかった。以前、ロシア人農村住民の精神的、宗教的教育について同様に配慮されなかったことを思い起こすならば、この看過を過去における聖職者の一般的方針として書き記さねばならない。思うに、これは聖職者学校のスコラ学的、一面的性格、生活への応用困難な方針に帰せられると同時に、過去、我々の中の聖職者をも含む上部階層が、平凡な農村の民衆を期待できない醜く無学な群衆としてあまりの軽蔑をもってみてきたことに帰せられる。そして異族人に対しては、特別な言語と独特で不衛生な生活様式、さらにロシア人との疎遠さの故に、ほとんど動物に対するが如き目を向けてきた。最近、我々の文学や社会思想の中で、平凡な民衆の観念や道徳的信条について、より深く究明しようという志向が目醒めた。これにつれて彼らの中に高潔な人間としての資質、宗教的要求が存在するということを確信しはじめた...」^{*10}。

ここにあるのは精神的・宗教的感化という点で「異族人」民衆へのアプローチを怠ってきた正教聖職者への批判と「高潔な人間としての資質」あるいは「宗教的要求」を持った教育の対象としての「異族人」民衆の「発見」である。では、どのようにして「異族人」民衆にアプローチするのか。ここで鍵になるのが精神的指導者としての「異族人」聖職者の育成とイリミンスキー・システムの核心たる母語による教育である。

「[従来のクリヤシェン・タタールの学校からは] 異族人の聖職者がいくらか生まれたのだが、彼らは学校で得た知識を民衆の中に持ち込むことに成功しなかったし、結局ロシア化して自らの民族とは縁が切れてしまい、彼らにとっては失われた存在となった。我々は反対に、自分たちの生徒にキリスト教教育におけるクリヤシェン・タタール民衆の道案内人たることを期待している。それゆえ、キリスト教教育の原則のもとで、できるだけ一般教育を与えようとしているし、またタタール語を教授語としている。学校教育の基礎と手段は必ず母語でなければならない。というのも、それによって生徒に受け取られる宗教的、道徳的、及び科学的観念が彼らの意識に明瞭、明確となり、彼らの心と道徳的感觉に良い影響をもたらすから

*10 N.I.II'minskii, "Religioznoe sostoyanie kreshchenykh tatar," *Pravoslavnoe obozrenie* 18 (1865), pp.138-139.

である。ロシア語も我々のところでは一教授科目であり、彼らは母語を介してそれを習得する。我々の生徒たちが民衆的タタール語で書かれた書物を喜んで読むのを認めるが、それは読んだことが明瞭に分かるからである。クリヤシェン・タタールの人々が学校にやってくると、生徒たちはこれらの書物を読んでやるか、聖史の中から何かを話して聞かせてやるが、タタール人たちは喜びとともに耳を傾ける。これもよく分かるからである。子どもたちは、クリヤシェン・タタールに対する影響力行使ということに関して緒についたのである。この影響を保障し拡大させるために段階的かつ緊急に民衆的タタール語への翻訳で、神聖な教えについての、また礼拝についての図書を出版することが不可欠である^{*11}。

さて、それではいわゆるイリミンスキー・システムが最初に試された場がどのようなものだったのか。イリミンスキーと神学大学の同僚マーロフ、そして教師のティモフェーエフのわずか3名で、全く新たにクリヤシェン・タタールの民衆を対象にした学校を極々小規模から始めたのである。当然のことだが、子どもをいかにして集めるかということが初期の切実な課題となった。

「9月の初めまでに、ヴァシーリ・ティモフェーエフは、自分の村からカザンに戻った。彼の家族の他に2人の元生徒の少年、彼の妻の姪である1人の少女がやって来た。我々は、郊外の神学大学近くに、月6ルーブルで校舎用の小さい家屋を借りた。新しい住まいに落ちついてティモフェーエフは、彼の生徒たちとともに生活を始めた。

...9月が来て10月が来たが、新来の生徒は一人も現れなかったし、農村から何らの知らせももたらされなかった。慰めに我々はこうした滞りをさまざまな副次的原因によって説明した。道路の通行困難、クリヤシェン・タタールの生活の多忙である。しかし時に、新しい読み書き信奉者の熱意が冷めてしまって、我々の学校などは儂い夢ではないかといった恐るべき考えが頭を去来した。

...11月3日になってとうとう、子どもたちが学校へやって来た。ティモフェーエフの出身地であるニキフォロフ村から5名、ウラディミーロフ村から1名、クルシチ村から1名だ。実際、泥濘が彼らを阻んでいた。そしてクルシチ村では、どこから出たのかは分からないが、我々が授業料を徴収するといううわさが起こった^{*12}。

これは学校がカザン学区によって承認された1864年の状況である。当初、生徒を

*11 N.I.II'minskii, "Shkola dlia pervonachal'nogo obucheniia detei kreshchenykh tatar v Kazani," *Pravoslavnoe obozrenie* 15 (1864), p.161.

*12 Ibid., pp.156-158.

集めるにあたっては、ティモフェーエフが地元の村で得ている人間的信頼、あるいは、その評判の周辺村落への伝播といったことが頼りだった。これが学校というものへの疑いを取り除く前提となったようだ。その上で、読み書き能力へのクリヤシェン・タートル民衆の関心に訴え、「授業料も鞭打たれることもない学校」、「母語を使った分かりやすい授業」ということでイリミンスキー等は生徒集めに奔走した。イリミンスキーによれば翌 1865 年 11 月現在で学校には、前年からの生徒 10 名、新しい生徒 15 名の 25 名がいた^{*13}。

イリミンスキーは、「喜んで異族人民衆に受け入れられる学校」の定着がこの地域へのイスラムの波及を阻むと考えていた。そして基督教の学校が受け入れられるには、それが運営において国家から独立しておらねばならず、また地域住民によって財政的に支えられていなければならないとも考えた。「正教のロシア社会とクリヤシェン・タートルの相互の志向性、学校への一方の参画と他方の信頼」が学校の発展のための条件であった。だが現状は全く不十分であり、その一方でムスリム・タートルの学校のありようをイリミンスキーは羨望さえも含んだ眼差しでみていた。

「タートル人にとって学校を建てることは寺院を建てることと同程度に神の意にかなった行いとして考えられている。多くのタートル人の遺言状を読む機会があったのだが、敬虔な金持ちたちは、必ず数千ルーブルを寺院及び学校建設に捧げる。こうして、このように力強くタートル人の中にマホメット教教育が普及し、このようにしっかりとマホメット教が根づいたのである。残念ながらロシア人の意識の中では、学校は慈善施設の中には数えられていない。正教徒の金持ちは、熱心に教会を建て、イコンを金箔で飾り、千ブードもの鐘を铸造するけれども、精神の聖堂の建設と装飾、すなわちそれは、もちろん、整った、そしてしかるべき形で管理された民衆学校において完全に可能となる神意にかなった民衆の教育と教導であるが、これに意を払うことはない。...我々の思い、それは 100 人の子どもたちと教師の家族のための、贅沢ではない建物の、快適で行き届いた、そして質素な教会付き校舎を建設することである」^{*14}。

それでは、もう少し学校の目的・理念のレベルで、イリミンスキーはこの時期、どのように考えていたのか。まず、「ロシア化」という用語は、教育を受けた子どもが自民族の社会との縁を切ってしまうという意でむしろ否定的に用いられるケースがある。一方、基督教教育については、基督教信仰と伝統的民俗信仰の差は、観

*13 N.I.II'minskii, "Shkola dlia detei kreshchenykh tatar," *Pravoslavnoe obozrenie* 18 (1865), p.89.

*14 Ibid., p.91.

念の「発達」と「未発達」の差、「精神の成長」の度合いの問題としてとらえられる。ここでは、礼拝への臨席や聖歌指導等、子どもを正教儀式に触れさせることが、いわば感受性や感覚的鋭敏さといった能力開発のきっかけとして考えられている。イリミンスキーは次のように記している。

「いわば心理学的な点から異族人をみると、ある布教家たちがシャーマニズム的見解や儀礼を全く恐ろしい洪水のように迫害し、その大部分が不毛であるようなあらゆる手段で殲滅せんと努めているのは、私には奇妙である。私の確信するところでは、こうした信仰は、ほかでもない創造主によって人間の本性に深く植えつけられた、畏敬の対象や神秘的なものを希求する心である。ただ幼年期にある民族においては、それら畏敬の対象が彼らの単純で全く未発達な観念に応じて解釈されているのである。....

知的にあまりに早く成長した子は、往々にして浅薄で短命であることは、よく知られており、子どもの知的発達を力づくで早めることを教育学は有害だとしている。そこで純粋に誠実にシャーマニズムを信仰している異族人を、時期尚早の洗礼の提案で怒らせるかわりに、彼らの教育に配慮することが必要である。またより実用的なこととしていうと、学校及び母語での図書出版を仲立ちとして彼らの中にキリスト教の素養と全人類の啓蒙を育て、そのことで彼らの思想の成熟を促すことが必要である。そのとき彼らは自ら自然に、自発的に、幼児的迷信を捨てて、成長した精神の志向性に応える宗教としてキリスト教を受け入れる。そして自ら洗礼を受けることを要求するのである」¹⁵。

イリミンスキーによれば、当初学校での学習課程は、最初の2.5ヶ月から3ヶ月で、キリル文字のアルファベットの学習から『創世記』のタタール語訳を読むところまで進んだという。その後、ロシア語の学習を開始し、「ヤースナヤポリャーナの書物」がタタール語訳付きで学ばれた。その他、イリミンスキーは、教会内や街路、見学先のカザン大学「動物学展示室」での教師と子どものやりとりを詳しく紹介したりしている¹⁶。こうしたことの中に、「異族人」の「文明化」の過程を普遍性をもった経験として記述しようとする彼の並々ならぬ意欲がみてとれる。教育の対象としての「異族人」を、同じく教育の対象としての「幼年期」、「幼児」、に重ねる見方を土台として、イリミンスキーは、ティモフェーエフによる教育行為が子どもたちをどのように変えるかということ、すなわち、教授者と子どもの具体的な関係の場に強い関心を向け

*15 Il'minskii, "Religioznoe sostoyanie...", pp.139-140.

*16 N.I.Il'minskii, "O shkole dlia pervonachal'nogo obucheniia detei kreshchenykh tatar," *Pravoslavnoe obozrenie* 17 (1865), p.33.

ていたのである。

4. 対東方諸民族教育政策のなかのクリヤシェン・タタール学校

1866年、沿ヴォルガ地域農村におけるタタールのイスラムへの改宗の波を一つのきっかけとして、カザンのクリヤシェン・タタール学校の分校が農村部に開設される。これに伴いカザンの学校は中央クリヤシェン・タタール学校となって、農村部の分校の指導者を養成する役割を担う。これ以後、中央クリヤシェン・タタール学校の修了者の一部が神学系中等学校に進んだこと、正教典礼文の民族語訳や非ロシア人聖職者叙任が宗務院の管掌事項であったことを通して、中央クリヤシェン・タタール学校は宗務院から注目される。またイリミンスキー・システムの学校に対する援助を主な活動にする団体、グーリ兄弟団の初代の総裁にカザン学区総監シェスタコフが就いたことは、文部省とのつながりが生じたことを示す。また、文相トルストイは1866年、沿ヴォルガ地域訪問の際にイリミンスキーらの活動に感銘を受け、これが1870年の『異族人教育規則』策定への動きにつながっていく^{*17}。

イリミンスキーは、上述のようにキリスト教教育のもつ普遍的「文明化」の作用を強調しつつ諸民族の母語による民衆初等教育実践に着手した。だが、その彼が1870年以降、非ロシア民族の諸個人がイリミンスキー・システムの学校を足がかりにより高度の「文明化」を求めてロシアの上級学校に進学することには強硬に反対することになる。イリミンスキー・システムの学校が政府の目に止まり、対東方諸民族教育政策論議の対象となっていくのに従って、イリミンスキーの発言からは諸民族の同化と差別に係わる矛盾が露呈されてくるのだが、これについての検討は今後の課題である。

*17 『異族人教育規則』制定までの経緯については、次の拙稿を参照：「19世紀ロシア民衆教育改革の性格について―対東方民族『異族人教育規則』(1870)の検討」『日本の教育史学 第39集』(1996)。